

## プログラム・ノート

加藤拓未

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)：

### 『ユダス・マカベウス』の主題による12の変奏曲 ト長調 WoO 45

1796年にベルリンで作曲されたと推測されている変奏曲で、主題はヘンデルのオラトリオ『ユダス・マカベウス』(1747)の第3部で歌われる合唱曲にもとづく。それをもとに12の変奏曲が展開されてゆくが、各変奏は、音楽的に関連しながら最終変奏へと向かうように構成されている。

第1～3変奏は、1曲ごとにリズムが細分化され、主題の装飾音が増えてゆく典型的な変奏。第4～6変奏では、主題が分解されてゆくタイプの変奏で、それが第7～9変奏では、さらに主題の旋律的な性格も失われてゆく。そして第10変奏からは、ふたたび主題の旋律性が回帰するだけでなく、テンポも指示されるようになり、第10変奏のアレグロ、第11変奏のアダージョを経て、最後はアレグロの快活な舞曲風の変奏が作品を締めくくる。

### チェロ・ソナタ第2番 ト短調 作品5-2

チェロ・ソナタ 作品5は、チェロとピアノのデュオによる最初の本格的なソナタという音楽史上、画期的な作品である。ベートーヴェンがベルリンを訪問した際、名チェロ奏者ジャン＝ルイ・デュポール(1749～1819)と親交を結び、彼から音楽的な刺激を受けることで、創意に火が付いたようだ。また、当時のプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世は、チェロ演奏を愛好していたことから、王にチェロ・ソナタを献呈することで覚えをめでたくするというベートーヴェンの目論見もあったとされる。作品5は完成後、1796年に国王の前で、デュポールとベートーヴェンによって初演された。

作品5の第2番は、2楽章からなり、**第1楽章**の冒頭には、この作品の大きな特徴とも言えるべき、かなり長大なアダージョの序奏が置かれている。その後、通常のソナタ形式が展開され、そして**第2楽章**は、主題が反復する7部構成のロンドとなっている。名手デュポールに触発されてか、この作品では、それまでの通奏低音楽器という役割からは想像できないほど、チェロが入念に作曲されており、表情豊かな旋律と名人芸を披露する。ピアノの活躍も重要で、その音は非常に華やか。これは、おそらく国王へのアピールのためと想像されるが、この作品の興味深いところは、両楽器がそれぞれ別々の役割を演じているようで、実はお互いを補いながら、ひとつの音楽世界を作り出すように書かれているところにある。まさにベートーヴェンの実験的精神あふれる野心作である。

## 『魔笛』より「愛を感じる男の人たちには」による変奏曲 変ホ長調 WoO 46

ベートーヴェンは、モーツァルトの最晩年の作『魔笛』(1791)から主題を採った変奏曲を2つ作曲している。いずれも、鳥刺しパパゲーノにまつわる曲を主題としており、おそらく彼は、パパゲーノというキャラクターにある種の共感を抱いていたのではないか。市民革命の時代に、庶民出のヒーローは歓迎されたからである。本作は第1幕で歌われるパミーナとパパゲーノの二重唱にもとづいたもの。作曲はおそらく1801年で、主題と7つの変奏で構成されている。

第1～3変奏では、リズムが細分化され、主題への装飾音が施されてゆく。第4変奏は変ホ短調となり、雰囲気が一変し、深い情緒が描き出される。第5変奏からは「いくぶん活発な速いテンポで」というテンポ指示が明記されるようになり、それは第6変奏のアダージョ、第7変奏のアレグロとつづく。第7変奏にはコーダがあり、その末尾で主題が原形に近い形で鳴り響き、全曲を結ぶ。

## チェロ・ソナタ第3番 イ長調 作品69

ベートーヴェンは1803年以降から数年間にわたって、立てつづけに傑作を生み出す創作の充実期を迎える。そして、この時期から彼の作品は、くっきりと明瞭な個性が前面に表れ、密度の濃い創意をはらんだものとなった。まさにその只中で誕生したのが、この第3番であり、「運命」や「田園」などの交響曲と同時期の1807～08年に書かれている。直接の創作動機は明らかではないが、第2番のような、いわば実験的な性格はもはやなく、むしろ作者の達観から創作の次元が上がり、巨匠然とした風格が作品に漂っている。

作品全体は3楽章からなり、**第1楽章**はソナタ形式で、冒頭でチェロが第1主題の前半部分をゆったりと示し、同後半部分をピアノが受け継いで示す。これに対し、第2主題はホ長調で、8分音符の上行音型。作品5と比べて、チェロとピアノの模倣による対話が増え、両楽器の関係がより洗練されていることを実感する一方で、展開部の冒頭で、J. S. バッハのヨハネ受難曲、第30曲アルト・アリア“Es ist vollbracht (成し遂げられた)”の旋律が引用されており、ハッと切なさを覚える。**第2楽章**はスケルツォ(イ短調)とトリオ(イ長調)からなり、図式化するとA-B-A-B-A(Aはスケルツォ、Bはトリオ)という5部構成。そして**第3楽章**は、18小節の緩徐部分(アダージョ)の導入を伴ったソナタ形式で、優美な音楽のあとと示される第1主題は、第1楽章のそれと動機的に関連性があり、曲全体の統一感を持たせたものとなっている。